

白雲片片

第四回

寂子、又た作麼生

今回は瀧山靈祐禪師とその法嗣・仰山慧寂禪師が登場する古則を紹介します。靈祐禪師は、初の禅林規矩である百丈叢林清規を著したことで知られる百丈懐海禪師の法嗣です。

靈祐禪師にはたくさんさんの弟子がいましたが、その中でも慧寂禪師は抜群の器量の持ち主だったようです。仰山慧寂禪師と臨済宗の祖・臨済義玄禪師とは法の上で従兄弟の關係に当たります。

我々の法系から言うと、薬山惟儼禪師や雲巖曇晟禪師、洞山良价禪師と大体同じ時代を生きた方々です。

正法眼蔵三百則の第三百二則

『大瀧山大円禪師、坐する次いで、仰山

侍立す。師云く、寂子、近日宗門の中

の令嗣作麼生。仰云く、大いに人有り

て此の事を疑著す。師云く、寂子、又

た作麼生。仰云く、某甲は祇管に困来れ

ば眼を合わせ、健なれば即ち坐禅す、所

依に未だ曾て説著せず。師云く、この田

地に到るも也た得ること難しや。仰云

く、某甲が見処に抛るに、此の一句の語

を著せんこと亦た得ず。師云く、子一人

のみ也た得ずと為す。仰云く、古自り

聖人尽く皆な是の如し。師云く、大い

に人有りて汝が与麼に祇対することを

笑わん。仰云く、某甲を笑うを解する

は、是れ某甲と同参ならん。師云く、出

頭は作麼生。仰、禅牀を遶ること一匝

す。師云く、古今を烈破せり。』

以上が古則の全文です。

文中の「師」は瀧山靈祐禪師、「仰」は仰山慧寂禪師を指します。大瀧山大円禪師というのは靈祐禪師のことです。

内容は、靈祐禪師が坐禅をしていた時に弟子の慧寂禪師がその傍に立っていました。この頃、慧寂禪師は靈祐禪師の侍者をしていたと思われます。

そうすると、靈祐禪師が「寂子」と慧寂禪師に声をかけ、「この頃、自分が率いているこの教団の中で良い後継者に関して議論が行われているかどうか」と質問をしました。「宗門」という言葉はこの頃からあったんですね。

そうすると、慧寂禪師が、「確かにたくさんさんの僧侶がお師匠様の後継者は誰であろうかといういろと議論しております」と答えました。

それに対し靈祐禪師が「寂子」と呼びかけて、「お前はその後継者になる気は

ないのか？」と問いかけました。「作麼生」には「どうでしょうか」といった意味があり、相手の返事を促す言葉のようです。

すると慧寂禅師は「私はただ疲れたら眠り、元気が良い時は坐禅ばかりしております。ですので、今まで仏の教えに関して説明ということをしたことがございませぬ」と答えました。つまり、説法をしたことがないので遠回しに遠慮申し上げる返事をしたのです。

そして靈祐禅師が「お前は疲れたら眠り元気な時は坐禅をしているという境地にすでに達しているのだから、後継者として指導に当たることができるといえないのか？」と問いかけたところ、慧寂禅師は「一つの言葉に執着することとはなかなか難しゅうございませぬ」と答えました。つまり、人に仏道を教えるというふうなことはとても難しく、自分にはできそうにもないと言ったのです。

そうすると靈祐禅師は「お前は正統な後継者になって説法しようと思えばできるのにも関わらず自分でできないと思っている」と言いました。

それに対して慧寂禅師は「過去におい

て釈尊の教えを得た方々も、どうも私のこのような態度、つまり坐禅ばかりしておいて説明は何もできないというふうな様子と似ているようなところがあります」と答えました。

そうすると、靈祐禅師が「おそらく誰かがいて、お前が今そのように返事をしたことを笑うであろう」と言いました。慧寂禅師は、自分は坐禅ばかりして説法はできそうにもないと言っているけどその反面、自分は仏道についてはもう既に過去の祖師方と同等の立場に入っているという自信があったので、靈祐禅師は仏道とは何かが分かっている人が慧寂禅師の答えを聞いたならばこいつは良く分かっているなという意味で好感を持って笑うだろうと慧寂禅師を暗に認めたのです。

それに対して慧寂禅師が「私のこのような状態を笑う者は私と同じ境地に達した人でしょう」と言いました。

これを聞いた靈祐禅師が「頭の中での理屈の話は分かっていた、具体的な行いで今お前が述べたような境地を表すとすればどうなるか」と言いました。

すると慧寂禅師は靈祐禅師が坐禅している場所の周りをグルッと一周歩いて回りました。慧寂禅師はこの行動で、仏道の最高の境地というものは自分が今のように歩くことの中に現れている、具体的な日常生活それこそが釈尊の教えなんだと端的に実行して見せたのです。

これを見た靈祐禅師は「お前の行動は釈尊在世中の過去から現在に至るまでのさまざまに仏祖の教えを全部粉々に砕いてしまうほどの内容である」と慧寂禅師を絶賛されたのです。

参考文献「西嶋和夫著 真字正法眼蔵提唱中巻一」。

